様式 C-7-2

自己評価報告書

平成 23 年 4 月 25 日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2012
課題番号：２０５２０４４２
研究課題名（和文）　コーパスを活用した英語シノニム・語法研究

研究課題名（英文）　A Study of English Synonyms and Usage Using Corpus Data

研究代表者
井上　永幸（INOUE NAGAYUKI）
広島大学・大学院総合科学研究科・教授
研究者番号：１０２３２５４７

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・英語学
キーワード：シノニム，類義語，語法研究，コーパス，辞書

１．研究計画の概要

本研究は，平成 20 年度（2008 年度）から平成 24 年度（2012 年度）までの 5 年間に，日本人英語学習者が誤りやすい 12 項目の英語シノニム・語法について，統語的特徴や意味的特徴を種々のコーパスを使って分析し，日本人英語学習者がそれらを使用する場合にどういった点に注意すればよいかをふまえて，それを記述しようとするものである。

２．研究の進捗状況

先行研究の調査の後，研究対象表現の問題点を明らかにし，Wordbanks*Online* や SketchEngine 上で提供されているコーパス，Linguistic Data Consortium（LDC）から提供されている各種コーパスを使って分析してゆくことになる。これまで，以下のような事項に関して成果を得ている。

(1) 自分の趣味について語る My hobby is *do*ing [to *do*]. の型では to *do* より *do*ing が好まれ to *do* と *do*ing の性質をよく反映していること。

(2) 存在の there 構文としては there is の短縮形である there's の形がよく見られるのに対して there are の短縮形である there're の形は非短縮形の 100 分の 1 にも満たず there's の方が記号化が進んでいること，(3) 否定的評価を表す語と共起することが多い a little (bit), a bit, slightly であるが，比較級を修飾する場合，変化を暗示する場合，only を含んで否定的暗示がある場合，強意を含む場合などは肯定的動詞とも用いられること。

(4) it is 形容詞 (for A) to *do* の型において for A の出没は文脈から類推できない場合に限られ全体の 1 割程度であること。

(5) 代用表現である do it/do that/do so などについて，do it/do that は積極的に禁止･許可･意志･必要性について述べる場合に，do so はややかたい言い方で，命令･助言などにただ従う場合や消極的あるいは二次的で何気ない行為について述べるときに好まれること。

(6) 様態を表す as in の延長線上には少なくとも，例を挙げるときに，「(たとえば) …みたいに」の意で，理解を助けるための単なる例示機能に変化した用法と，話し言葉で，聞き手との共通知識を前提に，特定の事項の回顧を促進させようとする用法が認められること。

(7) 特定の状態への移行を表す come to [into] NP において，to は，come to terms (合意に達する)，come to an end (終わる)，come to conclusion（結論に達する）など，最終到達状態を意識する表現となる場合に好まれるのに対して，into は，come into force [effect] (〈法律などが〉発効する)，come into play（機能し始める），come into existence（生まれる）など，物事の開始を意識する表現となる場合に好まれる傾向があること。

(8) silent と quiet について，quiet が多様な名詞・副詞・動詞と用いられるのに対して，silent は通常は言語や音声を伴うものを無言あるいは無音で行う場合や，もともと無言あるいは無音で行われるものでも対照的に強意で付加される場合に好まれ，その際 silent の段階性の低さも関係していること。

３．現在までの達成度

② おおむね順調に進展している

（理由）

最終的には 12 項目のシノニム表現について扱う予定であるが，現段階で 8 項目につい

て分析が進んでおり，今後いくつかの分析項目を加えた上で，最終的に 12 項目へと絞ってゆく予定である。

４．今後の研究の推進方策

引き続き，同様の過程・手続きを踏みながら，設定したシノニム・語法に関する 12 項目について分析を行ってゆく。なお，本研究は，本研究者のみで行うため，共同研究者の途中離脱などの可能性はなく，また，平成 16 年から平成 19 年における科学研究費補助金による研究活動の経験などをふまえて，順調に研究が推進できることを確信している。

５． 代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

①井上永幸，「コーパスを活用した英語シノニム・語法研究 ―quiet と silent」，『人間科学研究（広島大学大学院総合科学研究科紀要 I)』，第 5 巻，査読有，2010，pp. 1-23

②井上永幸，「辞書編集におけるコーパス活用」，『英語語法文法研究』（英語語法文法学会編），第 17 号，査読有，2010，pp. 5-22

③井上永幸・山本康一・鹿島康政，「『用例コーパス』を使った語彙指導・学習」，『HYPERION』（徳島大学英語英文学会），第 55 巻，査読無，2009，pp. 17-36

〔学会発表〕（計６件）

①井上永幸，「コーパスを活用した英語シノニム語法研究と辞書編集」，第 20 回広島大学外国語教育研究センター 外国語教育研究集会〔招待講演〕，2011 年 3 月 4 日，東広島市

②井上永幸，シンポジウム：文法研究資料としてのコーパスデータの批判的検討「辞書編集におけるコーパス活用 ―意味・用法の同定をめぐって―」，日本英語学会第 28 回大会〔講師〕，2010 年 11 月 14 日，東京

③井上永幸，シンポジウム：大規模コーパスを英語研究に有効利用するための留意点について「辞書編集におけるコーパス活用」，英語語法文法学会第 17 回大会〔講師〕，2009 年 10 月 24 日，京都市

④井上永幸，シンポジウム：英和辞典とコーパス「『ウィズダム英和辞典』（第 2 版）：Corpus-Based から Corpus-Driven へ向けて」，第 31 回英語コーパス学会〔司会・講師〕，2008 年 4 月 26 日，寝屋川市

⑤井上永幸，ワークショップ「『用例コーパス』を使った英語指導・学習《大学編》」，第 31 回英語コーパス学会〔講師〕，2008 年 4 月 26 日，寝屋川市

〔図書〕（計１件）

①井上永幸，松柏社，『コーパスと英語教育の接点』〔分担：第 3 章 辞書とコーパス〕，2008，pp. 45-63

〔その他〕

なし